

縄文前期の集落変遷と生産用石器の組成から見た森林資源利用の在り方
－ 柏北部東遺跡群の調査成果から －

上 守 秀 明

目 次

1	はじめに	73
2	生産用石器の組成と生産活動に係る既往研究の概要	73
3	前期柏北部東遺跡群とその集落変遷	74
	(1) 立地と環境	74
	(2) 集落の変遷	74
4	生産用石器の組成から見た森林資源利用の在り方	90
	(1) 各期の生産用石器の内容と特徴	90
	(2) 既往研究との比較	92
5	おわりに	95
	(1) 各期の遺跡分布と柏北部東集落群の位置づけ	95
	(2) 柏北部東遺跡群の集落形成と生産活動	96
	(3) 今後の課題	96

1 はじめに

筆者には都市機構による柏北部東地区土地区画整理事業地内に所在する遺跡群（以下、柏北部東遺跡群）に係る整理業務を担当し、前期に属する遺跡の発掘調査報告書を取りまとめた経歴がある¹⁾。また、その際に抽出した課題を基に、遺跡群が属する下総台地北西部における縄文前期の遺跡分布と、時期の明確な遺構から出土した生産用石器の組成から見た生産活動について、論考を発表したことがある²⁾。

発表当時、千葉県北西部地区の対象地域で前期集落が検出されている遺跡の発掘調査報告書を悉皆調査し、竪穴住居跡出土の生産用石器の数量をデータ化したうえで、その数量比から当該地域の前期初頭から末葉までの森林資源（陸産資源ともいう。以下陸産資源は省略）をターゲットとした生産活動の推移について論じた。しかし、当時は柏北部東遺跡群に関しては駒形遺跡の一部が発掘調査報告書として公表されていただけで、多くが未整理・未刊行の状態であった。そのため、論考では駒形遺跡の集落様相や生産活動、生産用石器の組成について、予察的内容を記すにとどまった。

現在、柏北部東遺跡群の縄文時代に係る発掘調査報告書は全11冊が刊行されている。その内容は当財団並びに千葉県の調査例としては無論、関東地方のどんな事例と比しても特筆すべきものである。今回これらを精査して前期集落の変遷と分布の特徴を示すとともに、前期住居跡出土生産用石器の数量を集計し、既論考で導いた森林資源をターゲットとした生産活動の推移について、柏北部東遺跡群総体での在り方を提示してみたい。

2 生産用石器の組成と生産活動に係る既往研究の概要

本論の目的に関連して、縄文時代石器研究史のうちから生産用石器の組成と生産活動に係る主要な既往研究に注目すると、先ず1970年代に行われた研究が挙げられる。日下部善己と一条孝夫は各種生産用石器の用途を規定したうえで、東北地方で出土した中期石器の組成から該期の生産活動の在り方を論じている³⁾。

小林康男も各種生産用石器の用途を規定したうえで、関東・中部地方の前期から中期を7期に区分して、区分ごとの石器組成と地域性（含む安定性・流動性）を示した。そして、地域形成の背景を自然環境的側面と生産技術という人的側面から検討した⁴⁾。千葉県においても野口行雄が、房総半島における中期から後期前半の生産用具組成から該期の生産活動の様相を導き出し、その特性を考察している⁵⁾。

次いで1980年代後半から2000年代前半の研究を取り上げる。今村啓爾は関東中部地域の中期の遺跡から検出される群集貯蔵穴と打製石斧に数量差があることに着目し、石鏃＝狩猟具、打製石斧＝根茎類（ヤマイモ）採集のための土掘り具、磨石類＝植物性食料（堅果類など）の加工具と規定した。そして、その割合を三角グラム化して、対象範囲における地域性を抽出した上で、群集貯蔵穴や打製石斧の用途を論じた⁶⁾。

西野雅人は生業・居住様式の在り方に迫る研究を進めている。これは動植物遺体のデータ解析、出土人骨のコーラゲン分析の結果などに、今村の分析法を採用した石器組成を突き合わせたものである。その結果、東京湾東岸に所在する中期中葉から後葉期の通年定住の拠点集落では、どの生業にも偏らないバランスの良い資源利用がなされたとした。石器組成では有吉北貝塚など複数の通年定住の拠点集落で石鏃：打製石斧：磨石類の数量比が1：1：1になることが確認されたことを論拠としている⁷⁾。西野は植月学とともに同様の分析法によって、奥東京湾沿岸地域の前期初頭～前葉期の帰属時期がわかる住居跡出土の生

産用石器の組成を集計し、その分析結果と動植物遺体のデータ解析などを以て生業の傾向を知る手掛かりとした⁸⁾。この論考の諸点については、本稿の後半で改めて触れる機会を設ける。

3 前期柏北部東遺跡群とその集落変遷

(1) 立地と環境

縄文海進は早期後葉～前期中葉（約8,000年前～6,000年前）にその最盛期を迎えるが、その当時の千葉県は外洋と奥東京湾・古鬼怒湾という二つの大きな内湾に囲まれ、北西端で辛うじて関東平野の陸地とつながる島のような地形であったと想像される。本論では駒形遺跡をはじめ縄文前期の竪穴住居跡が検出された10遺跡を便宜的に柏北部東遺跡群と総称したが、この遺跡群は古鬼怒湾の湾奥部、柏・我孫子低地に面した標高約10～19mの台地上に位置しており、正に縄文海進時に繁栄した集落群と言える（図1●）。この台地は北側から南に向かって漸次、標高が高くなるが、古鬼怒湾区古常陸川水系から湾入した2本の支谷により、概ね花前Ⅰ・矢船Ⅰ・矢船Ⅱ遺跡の位置する台地（以下、北側台地）、駒形・富士見・大松遺跡が位置する台地（以下、中央台地）、原畑・小山台（A・B区）・寺下前遺跡が位置する台地（以下、南側台地）の3つに細分される（図2他）。



図1 縄文海進と柏北部東遺跡群の位置

(2) 集落の変遷

本遺跡群に構築された前期の竪穴住居跡の遺跡ごとの内訳は表1⁹⁾のとおりであるが、竪穴住居跡の総数は350軒と実に多数で、所々にある細別型式の欠落を不問にすれば多寡の差はあれ、前期初頭から末葉までほぼ切れ目なく居住が認められる。以下に前期各期の集落を構成する住居跡他の数や分布の特徴を記すとともに時期ごとの土器型式の概要を添えて述べ、集落の変遷を示すこととする。なお、この遺跡群には早期後葉条痕文期の集落も認められるので、これをこの地域の集落萌芽期と捉え、前期と分別する意味で0期とし、順次説明する。

表1 柏北部東遺跡群の住居跡

遺跡名/時期	花前	ニツホ	西山	湯袋	原畑・小山台	遺跡計
花前Ⅰ	0	0	0	4	2	6
駒形	15	5	14	32	6	72
富士見	6	0	4	86	3	99
大松	14	0	4	54	6	78
矢船Ⅰ	0	0	1	6	9	16
矢船Ⅱ	0	0	0	2	0	2
原畑	0	0	0	20	0	20
小山台A区	0	0	1	22	2	25
小山台B区	0	0	0	30	1	31
寺下前	0	0	0	1	0	1
時期別計	35	5	24	257	29	350

① 0期（図2・8）

遺構の内訳は竪穴住居跡36軒、炉穴162基以上となる。検出された遺跡は駒形遺跡、富士見遺跡、小山台遺跡（A・B区）の3遺跡で、駒形遺跡と富士見遺跡が標高10～14mの台地先端部、小山台遺跡A・B区が標高15～17mの台地先端部と、当時の沿岸部に占地する傾向が見て取れる。特に駒形遺跡と富士見遺跡の北側を分ける小支谷に面した範囲に集中しているが、駒形遺跡では竪穴住居跡27軒と炉穴群が集中的に検出された。特記事項として、図示はしていないが駒形遺跡では竪穴住居跡群の空白部などに、多量の礫と少量の剥片石器・礫石器からなる石器集中地点が複数認められることと、富士見遺跡で石鏃が11点と

多出する竪穴住居跡が1軒検出されていることを付記しておく。

図8に示した主要土器を瞥見すれば1～3は子母口式とこれに類するもの、4は野島式、5・6は鶉台式とこれに類するもの、7・8は茅山下層式、9・10は茅山下層式乃至茅山上層式、11・12は口端に加飾のある条痕文系、13は条痕文系である。このように集落設営期間は条痕文系土器の時期幅の中にあり、図2にある分布状況は条痕文期の一時的集落景観の累積と捉えられるが、一定の広さを持つ台地全体には広がらず、沿岸部各所に居住域が限定されている。

② 1期 (図3・8・9)

1期は花積下層式期で、竪穴住居跡35軒が検出されている。このうち主体となるのは、駒形・富士見・大松遺跡が接する位置に当たる南側の谷に張り出す標高17～18mの舌状台地基部にある29軒で、環状に分布する。また、駒形遺跡東部の標高15～16mの範囲にも6軒が列状に分布する。

特記事項として、竪穴住居跡覆土中からチャート製石鏃が未成品も含めて数点～20点近く出土し、多量の削片と両極打法による剥片・石核も認められることを挙げておく。駒形遺跡では11軒、富士見遺跡で1軒、大松遺跡で10軒検出されていることから、環状分布付近を中心に石鏃の製作・廃棄が行われたと思われる。このほかに図示はしていないが、被熱した土器片が伴う集石遺構もこの近傍から検出されている。

図8・9に示した主要土器を瞥見する。14は表に羽状縄文、裏に条痕文が施されるもので遺構外出土である。15～19はいわゆる撚糸側面圧痕文が施されるもので、15は原体が太く古段階と思われる。20～22は口縁部に集合沈線により重三角区画を、23は沈線で対向する重弧文が施される。24～28は縄文施文の土器、29～31は貝殻背圧痕文施文の土器である。25・26・28は折り返し口縁を呈し、29はこれに類する段を有す。27は横位の施文幅下端が閉端となる。

以上の主要土器の内容であるが、14・15は古段階で、他の土器は中・新段階と思われる。2か所にある集落のうち、古段階のものは列状の分布に含まれる2軒の竪穴住居跡から出土している。他の竪穴住居跡は花積下層式中・新段階に設営されたと考えられる。特に環状に分布する集落はこの時期幅で比較的連続して設営されたと思われ、集合的に居住する意識は高かったと推察される。

③ 2期 (図4・9)

2期は二ツ木式期で、竪穴住居跡5軒が検出されている。いずれも駒形遺跡南東端の標高16～17mの平坦な範囲に限定的に設営されたものである。特記事項として石鏃が10点出土した1か所を含め、石鏃未成品や剥片などが出土する石鏃製作に関連した竪穴住居跡が3軒、検出されていることを挙げておく。

図9に示した主要土器を瞥見する。文様要素等から32～34は新田野段階、35は貝崎第1段階と古・中段階であるが遺構外出土となる。36～40は主幹文様と点状文様の内容や描出法、縄文帯の幅狭等間隔区画法から新段階の貝崎第2段階に比定される。41～45はこの段階の縄文施文の土器であり、41～43は無文帯を有する。38・44・45には結節回転文が施される。これらはいずれも遺構出土である。以上の内容から二ツ木式期新段階に小規模・分散的な集落が営まれたと考えられる。

④ 3期 (図5・9・10)

3期は関山式期で、竪穴住居跡24軒が検出されている。内訳は駒形遺跡で14軒、富士見遺跡と大松遺跡で各4軒、矢船I遺跡・小山台遺跡A区で各1軒となる。台地別では北側台地の矢船I遺跡と南側台地の小山台遺跡A区の各1軒を除いて、他は中央台地の駒形遺跡・富士見遺跡・大松遺跡で検出されている。分布状況を瞥見すると、いずれも1軒～数軒が分散している。また、立地では駒形遺跡と富士見遺跡の一

部と矢船Ⅰ遺跡で台地縁辺部に位置するほかは、各遺跡の平坦地に設営される傾向にある。

特記事項として駒形遺跡の4軒の竪穴住居跡から、未成品も含めた石鏃が10点前後出土し、多量の削片と両極打法による剥片・石核も認められることを挙げておく。竪穴住居跡もしくはその周辺で石鏃製作が行われたと思われる。いずれも関山Ⅰ式期後半が帰属時期である。

図9・10に示した主要土器を瞥見する。46～66は関山Ⅰ式である。46～51は口縁部に半截竹管内側を用いた平行沈線による主幹文様と、瘤状貼付文による点状文様が施される。52～59は点状文様である瘤状貼付文のみの施文である。60～66は縄文施文の土器である。以上の縄文帯では65・66に直前段合摺が用いられるほかは還付末端が多用されており、異間隔横帯区画となる。なお、タガ状に巡らされるコンパス文を有する個体は全て真正である。

67～71は関山Ⅱ式である。67～70は口縁部に半截竹管内側を用いた平行沈線で主幹文様が描出されるが、基本構図は幾何学文となる。地文は67が還付末端、68は組紐、69が直前段合摺、70が摺糸文である。71は組紐施文で、タガ状に巡らされるコンパス文は真正ではなく、蛇行する平行沈線で描出される。72は鉢形土器、73・74は片口注口土器、75は台付鉢形土器である。縄文は72～74が還付末端、75が直前段合摺である。縄文の種類、口縁部文様などから72～74はⅠ式、75はⅡ式に比定される。

本遺跡群の関山式期の集落は、土器様相よりⅠ式新段階からⅡ式の一時的集落景観の累積と捉えられるが、やや小規模で分散的な集落であったと考えられる。

⑤ 4期（図6・10～12）

4期は黒浜式期で、竪穴住居跡257軒が検出されている。内訳は駒形遺跡で32軒、富士見遺跡で86軒、大松遺跡で54軒、原畑遺跡で20軒、花前Ⅰ遺跡で4軒、矢船Ⅰ遺跡で6軒、矢船Ⅱ遺跡で2軒、小山台遺跡A区で22軒、小山台遺跡B区で30軒、寺下前遺跡で1軒となり、多寡の差はあれ遺跡群の広い範囲に分布している。分布の傾向としては、1軒～数軒が分散する場合と、10数軒～数10軒が一定のまとまりを持つ場合がある。

台地別では中央台地が最も多く、次いで南側台地となり、事業地内に一部しか含まれない北側台地が最も少ない。一定のまとまりをもつ事例は富士見遺跡に数か所、富士見遺跡と駒形遺跡の境界に1か所、駒形・富士見・大松遺跡が接する位置に当たる舌状台地基部に1か所、小山台遺跡A区に1か所認められ、いずれも台地内側の平坦な範囲に設営されている。特に駒形・富士見・大松遺跡が接する箇所は最も集中する。

特記事項として、竪穴住居跡覆土中からチャート製石鏃が未成品も含めて数点～20点近く出土し、多量の削片と両極打法による剥片・石核も認められることを挙げておく。内訳は駒形遺跡で6軒、富士見遺跡で4軒、大松遺跡で3軒検出である。竪穴住居跡もしくはその周辺で石鏃製作が行われたと思われるが、全遺構数に比してかなり少ない。

図10～12に示した主要土器を瞥見する。77は相互刺突文が施される。76・78～81は還付末端が施される。76は口縁端部に刷毛目状沈線が施され、頸部には半截竹管内側を用いた平行沈線により複合鋸歯状の構図を描く。82は前々段合摺が施される。83・84は縄文を器面の乾燥が進んでいない段階で横位回転施文したため生じたミミズ腫れ状の粘土帯が認められる。85は板状把手を有す。86～88は口縁端部に刻み目状に連続押捺文が施される。86は結節回転文が施され、88は附加条第3種が施される。

89～96は縄文施文の土器で、附加条縄文が施される。種名が判別できるものは第1種と第2種で、軸の縄が不明なためいずれかに判別できないものが含まれる。89～91の器形は牽牛花状である。92は頸部に鍔

状隆起線が巡らされる。附加条による羽状縄文が菱形文になるものは、89・92・96である。97～100は口縁部文様帯に結節沈線で大形菱形文とこれに類する構図を描出するもので、いわゆる有尾系土器である。98の胴部には附加条縄文が菱形文となる。99の頸部には鐔状隆起線が巡らされる。

以上の土器群は既述した種々の特徴と同一遺構から出土した組み合わせから、古段階に比定される。

101～110は沈線文が施される。101は追加成形痕の上半は縦位沈線文、下半は縄文が施される。102は追加成形痕の上半は斜格子文、下半は縄文が施される。103は4単位の波状口縁と思われ、波頂部下に焼成前の穿孔が認められる。甕形の器形で口頸部には半截竹管内側を用いた平行沈線による横位展開文が、胴部には附加条縄文が菱形構成で施される。いずれも二帯構成となることから古段階と思われる。

104は口縁部に繊細な斜格子文が施され、頸部に2条の半截竹管内側を用いた平行沈線による波状沈線文が巡らされる。胴部以下には、半截竹管内側を用いた平行沈線による粗雑な菱形文が全面展開する。105～110は半截竹管内側を用いた平行沈線による図形文様が全面展開するもので、縦位区画を有する。縦位区画を有する文様は105・106・107の口縁部・109には葉脈状文、107の胴部・108・110には菱形文が施される。107の菱形文は粗雑で、108の菱形の内部には重弧沈線が付加される。

106は緩やかな波状口縁で、波頂部下に注口部の残存形態である隆起線による円文が配される。107は口縁端部に2条の連続刺突文が巡らされ、109は口縁端部上に刻み目状に連続押捺文が施される。110の緩やかな波状口縁端部は無文帯で、波頂部間に角状突起が付く。波頂部下に焼成前の穿孔が認められる。菱形文・縦位区画の描線の交点には円形竹管刺突文が配される。地文を有するものでは106が附加条縄文、109・110は単節縄文が施される。

以上に既述した土器群のうち、101～103は二帯構成となることから古段階、104は波状沈線による展開文を有し、105～108は縦位区画を有す展開文を特徴とすることから中段階、109・110は縦位区画を有す展開文及び種々の特徴と同一遺構から出土した組み合わせから、新段階と考える。

111～120は半截竹管内側を用いた平行沈線による結節沈線文や連続刺突文が施されるものである。111は口縁端部に楕円形の貼付文が4単位で配されると思われ、以下に縦位区画を有する菱形文が全面展開しよう。112・113は口縁端部と口縁部と胴部の区画に連続刺突文が施される。113の突起下には焼成前の穿孔が認められる。114は4単位の波状口縁を呈す甕形で、波頂部下に焼成前の穿孔が2孔認められる。頸部には複列の結節沈線文が巡らされるが、沈線間に円形竹管刺突文が連続的に施される。115は口縁部に数列の結節沈線文が横位展開する。

116～120は口縁端部の結節沈線文間が磨り消されるものである。116は4単位の波状口縁で、波頂部から繊細で鋭い沈線と複数の凹文が縦位区画線として垂下する。頸部にはコンパス文が巡らされる。117は鉢形で、116と同様の凹文が施される。118の胴部は複列の平行沈線で横位区画された内側に、結節沈線で対弧文が施される。口縁部には補修孔が認められる。119は波状口縁の頂部から平行沈線で縦位区画線が垂下し、嚢形菱形文が横位展開する。121は朝顔形の深鉢で、胎土は無繊維である。

以上の土器群は既述した種々の特徴と同一遺構から出土した組み合わせから、113・114が中段階もしくは新段階で、他は新段階に比定される。

122は深鉢の口縁部に付く注口部、123は4単位の波状口縁で、波頂部間に二山の角状突起が付く。波頂部下に注口部が認められる。これらは同一遺構から出土した組み合わせから、122が古段階、123が新段階に比定される。124・125は貝殻腹縁文が施されるもので、同一遺構から出土した組み合わせから124が中

段階、125が中段階もしくは新段階に比定される。

126は鉢で、半截竹管内側を用いた平行沈線により従位区画を有する葉脈状文が横位展開する。127・128は台付鉢である。127は4単位の波状口縁で、波頂部下に焼成前の穿孔が認められる。128は無文で、1対の補修孔が認められる。種々の特徴と同一遺構から出土した組み合わせから126・127は中段階、同一遺構から出土した組み合わせから128は新段階に比定される。

本遺跡群の黒浜式期の集落は、土器様相より古段階から新段階まで継続したと考えられ、これらの一時的集落景観の累積は、関東地方有数の集落跡を示している。この中では原畑遺跡の分散的な住居群がすべて古段階であることはわかっているものの、黒浜式の新旧型式を踏まえた判別は未了であるため、さらに細分された集落変遷の追求が今後の課題となる。

⑥ 5期 (図7・13)

5期は浮島・興津／諸磯式期で、竪穴住居跡29軒が検出されている。内訳は駒形遺跡で6軒、富士見遺跡で3軒、大松遺跡で6軒、花前I遺跡で2軒、矢船I遺跡で9軒、小山台遺跡A区で2軒、小山台遺跡B区で1軒となる。分布状況を瞥見すると、いずれも台地の平坦な範囲に設営されている。矢船I遺跡で一定のまとまりがあるほかは、1軒～数軒が分散している。特記事項として石鏃が石鏃・石鏃未成品や剥片などが出土する石鏃製作に関連した竪穴住居跡が1軒、検出されていることを挙げておく。

図13に示した主要土器を瞥見する。129は口縁部に半截竹管内側を用いた平行沈線により、対向弧線文が施される。130は口縁部を複列の爪形文で区画し、内部に平行沈線で変形した菱形文を展開させられる。131は口縁部に平行沈線を複合させた鋸歯状文が展開する。いずれも地文に撚糸文が施される。132・133は口縁端部に斜位刻み目の隆起線を巡らす。132は口縁部に多段矢羽根状文が施される。133は口縁部に木葉文が、地文に撚糸文が施される。以上は種々の特徴から浮島I式に比定される。

134～137は波状貝殻文が施されるものである。134は口縁部に刻み目が付され、変形爪形文で区画された口縁部には菱形文が展開する。135も口縁部に刻み目が付され、変形爪形文が施される。いずれも胴部には波状貝殻文が施される。136は口縁端部に刻み目が付され、以下に刺突文により粗雑な凹凸文が施される。以下には波状貝殻文が施される。以上は種々の特徴から浮島II式に比定されるが、136は同一遺構から出土した組み合わせからI式まで遡る可能性がある。137は口縁端部に刻み目が付され、以下に波状貝殻文が施される。同一遺構から出土した組み合わせから浮島III式に比定される。138は口縁部の輪積痕上に凹凸文が施される。浮島II式乃至III式に比定される。139は口縁端部に刻み目を付し、以下に波状貝殻文、爪形文を巡らす。数条の横位沈線で区画された中には磨消貝殻文が展開する。140は口縁端部に刷毛目状沈線を付し、以下に凸凹文、多段に横位の平行沈線文が施される。以上は興津式に比定される。

141は4単位の波状口縁で、爪形文が口縁端部と口縁下端を区画する。平行沈線による葉脈状文の基幹線は円形竹管刺突列である。諸磯a式に比定される。142は細隆起線に斜位の刻み目の付される浮線文が施される。143はC字爪形文が付随して弧線文あるいは木葉文が描出されよう。以上は諸磯b式に比定される。144・145は口縁端部に貝殻状突起が付される。144は口縁部以下の集合条線上の各所にボタン状貼付文が配される。145は集合沈線による矢羽根状文が多段に施され、口縁部下にボタン状貼付文が付される。以上は諸磯c式に比定される。

本遺跡群の浮島・興津／諸磯式期の集落は、土器様相より若干の欠落はあるものの、前期後葉から末葉にかけて、小規模かつ分散的な集落が形成されたと考えられる。



図2 0期の集落



図3 1期の集落



図4 2期の集落



図5 3期の集落

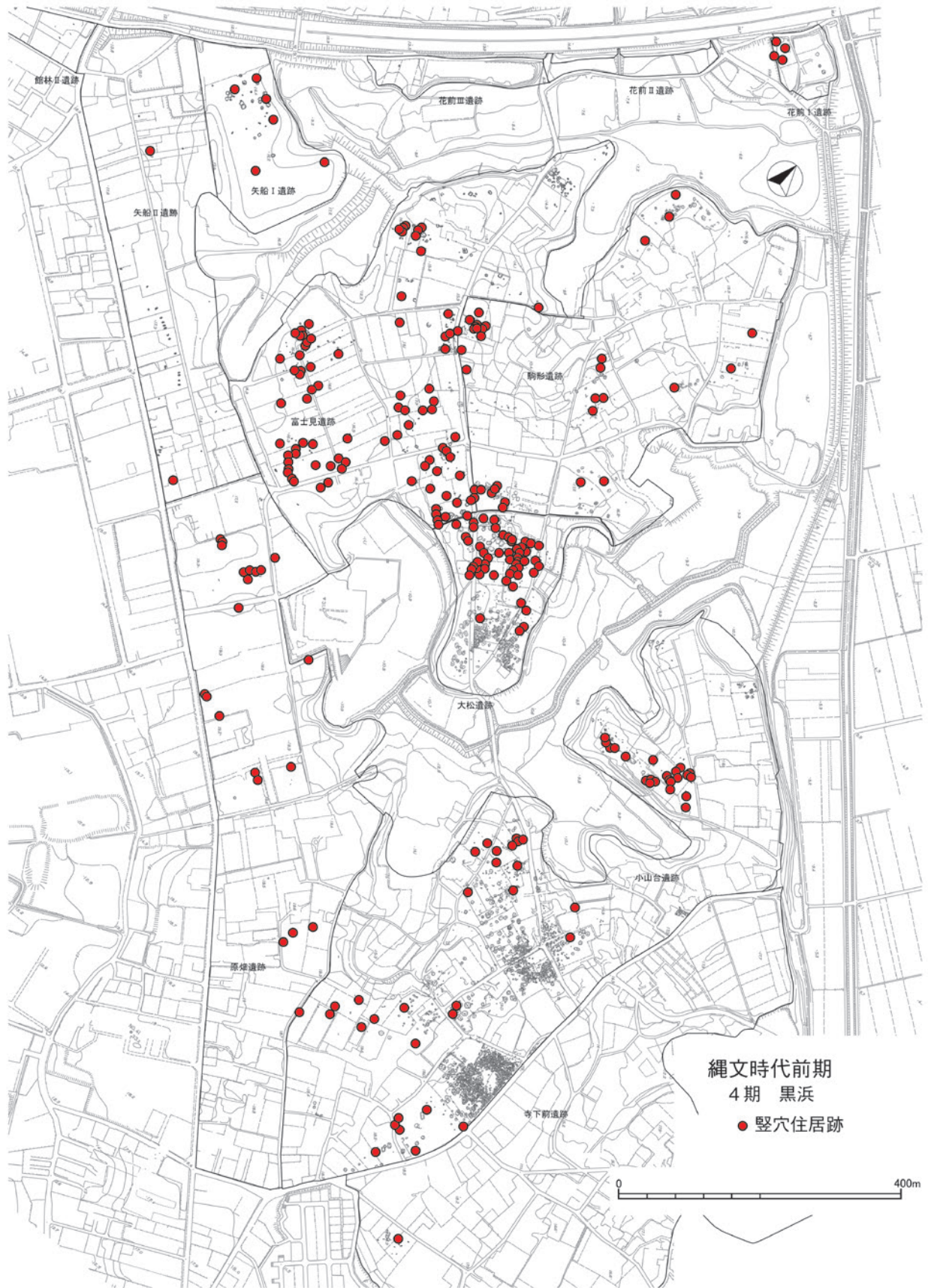
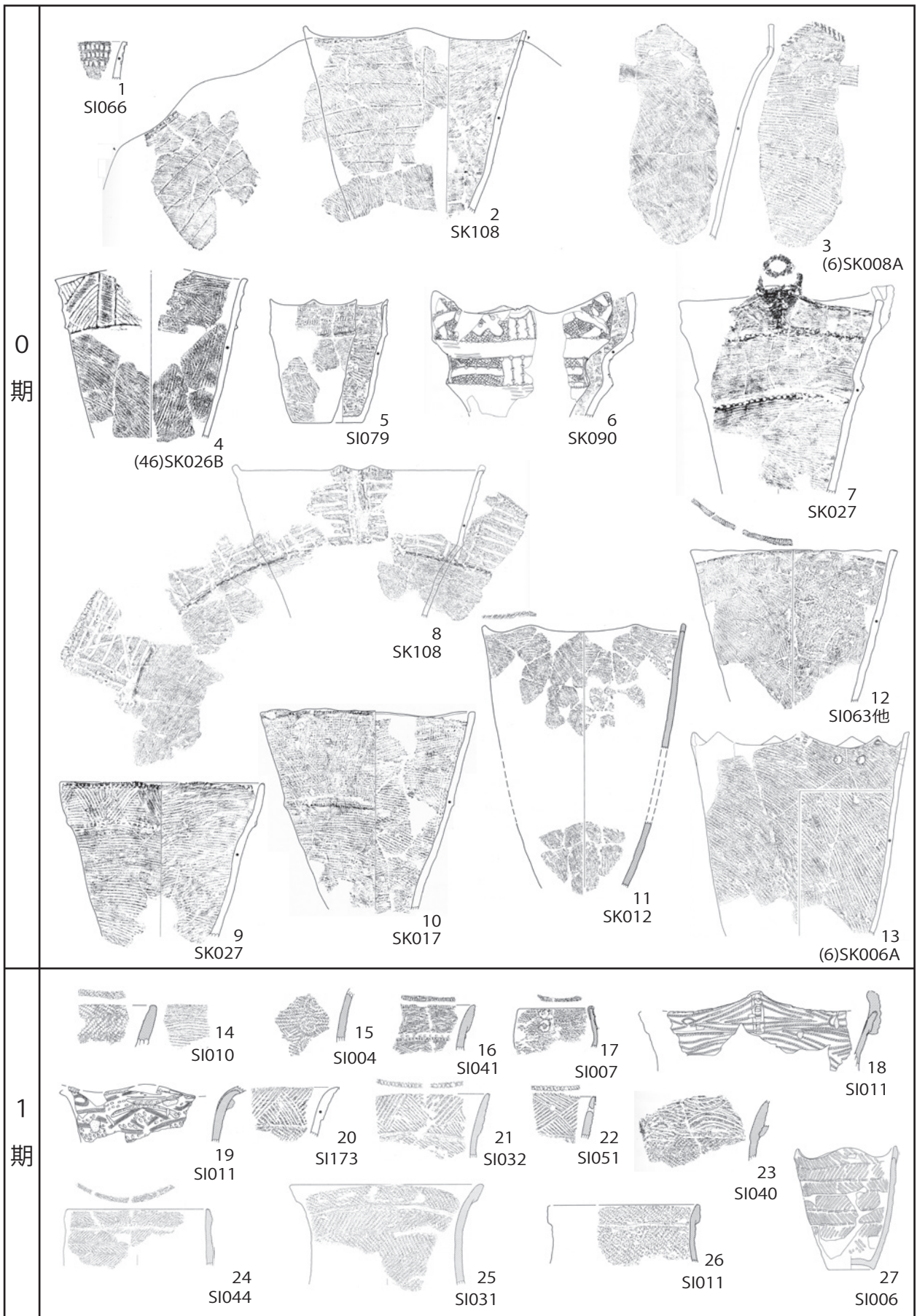


図6 4期の集落



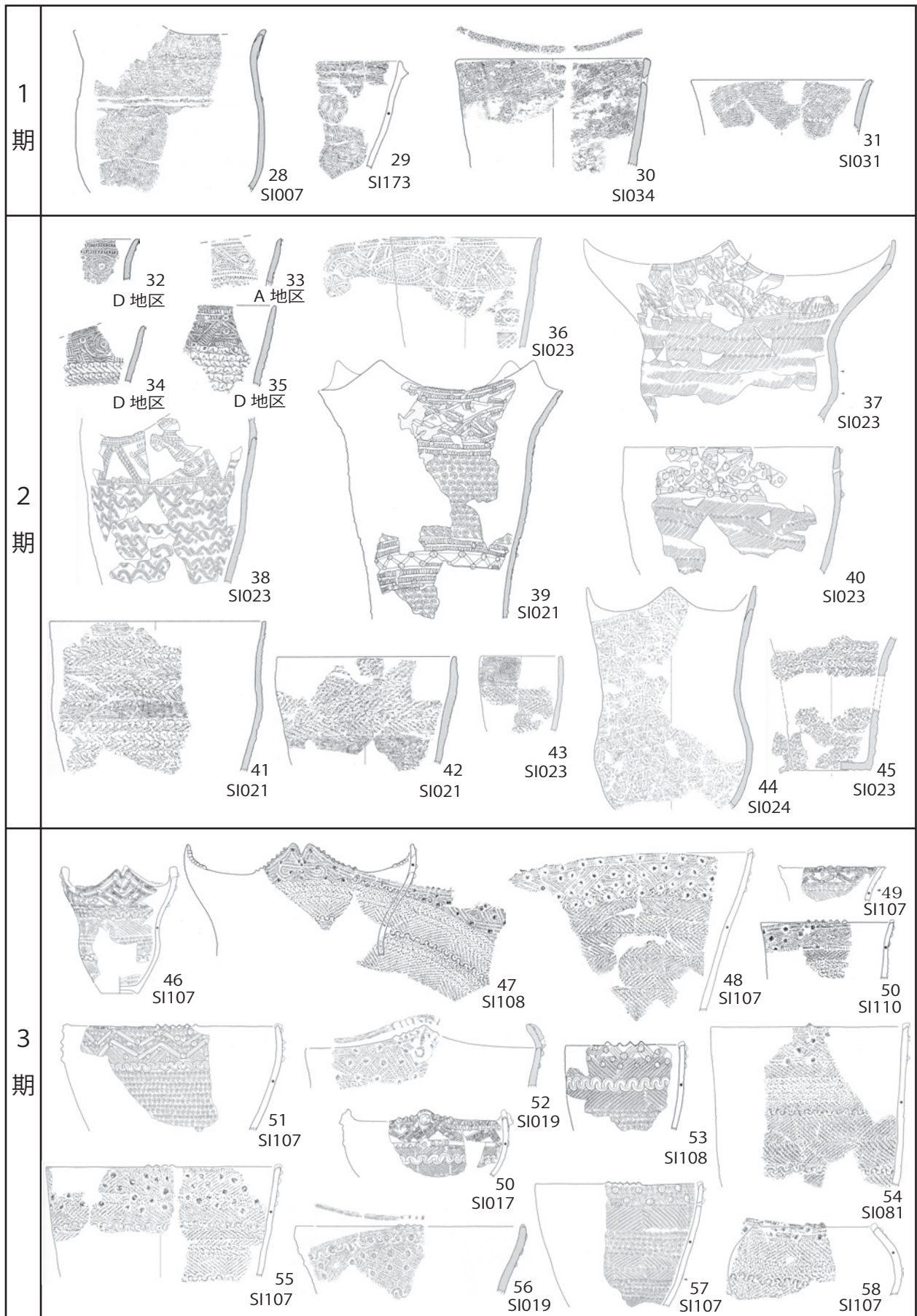
図7 5期の集落



0期 1・2・5・6・8・11・12：駒形 3・4・13：小山台 B 7・9・10：小山台 A

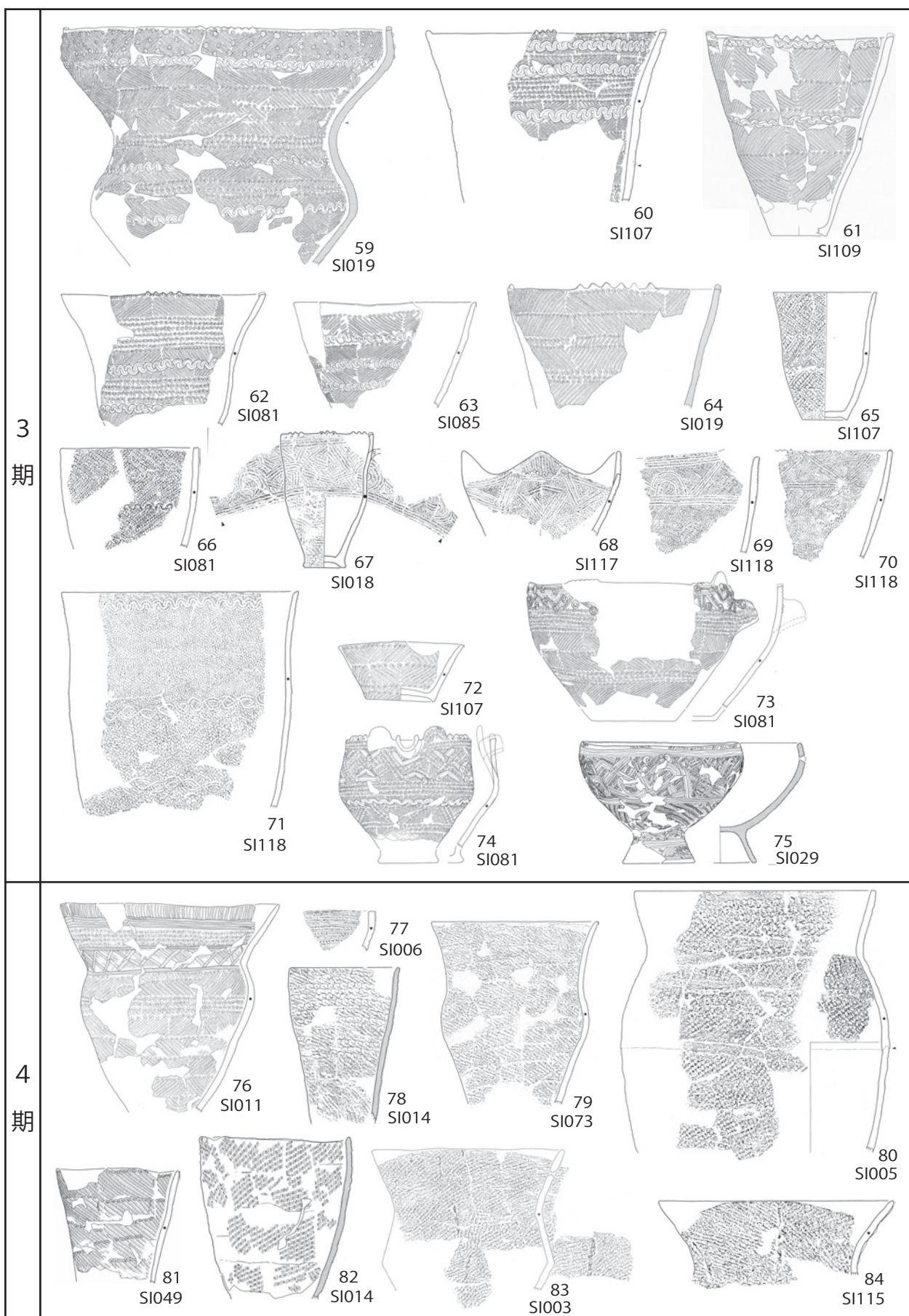
1期 14～19・21～27：駒形 20：大松

図8 時期別主要土器 1 (S=1/8)



1期 28・30・31：駒形 29：大松 2期 32～45：駒形 3期 46～58：駒形

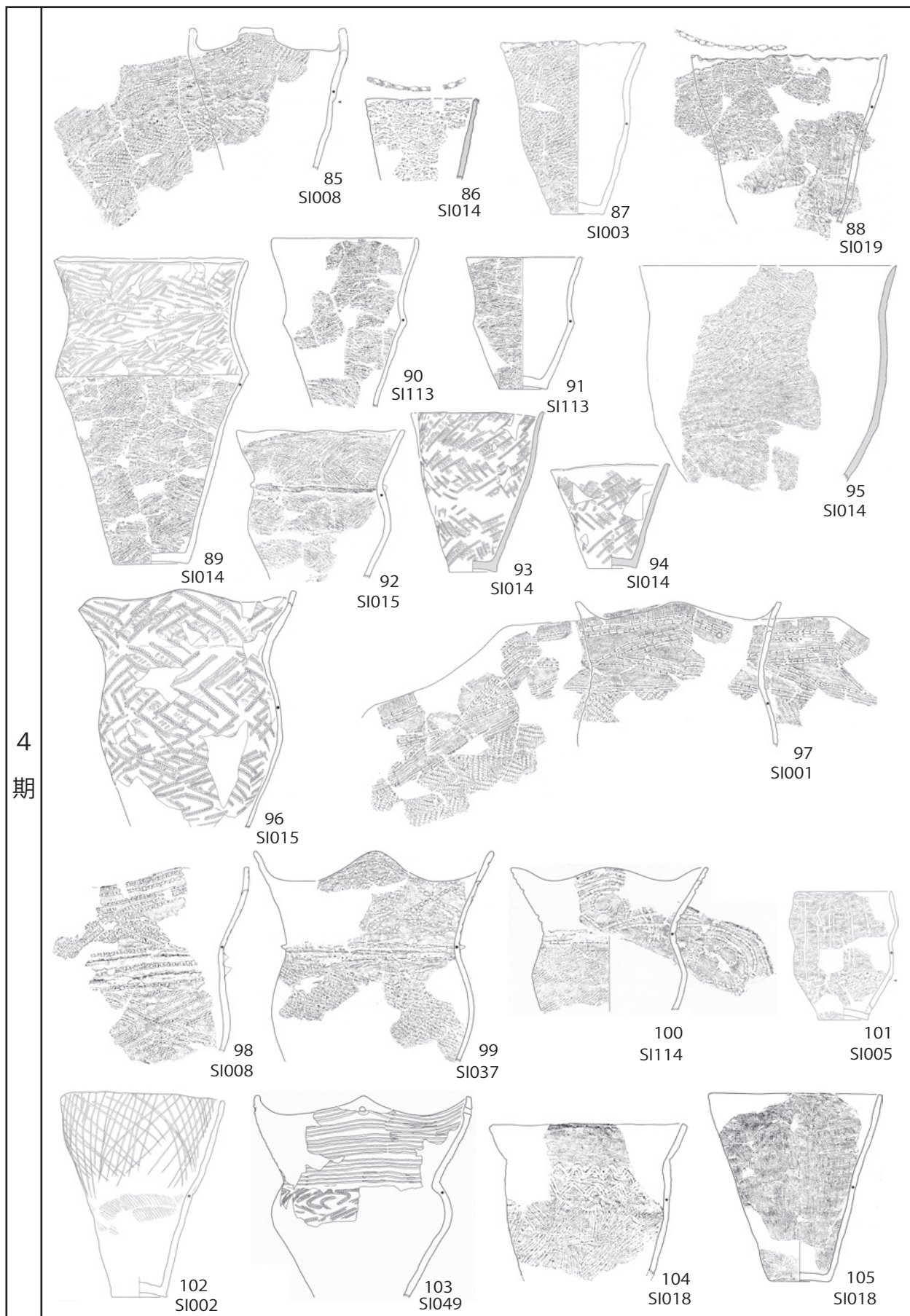
図9 時期別主要土器2 (S=1/8)



3期 59・60・62～66・68～75：駒形 61：富士見 67：大松

4期 76・77・80・83：原畑 78・82・84：駒形 79・81：富士見

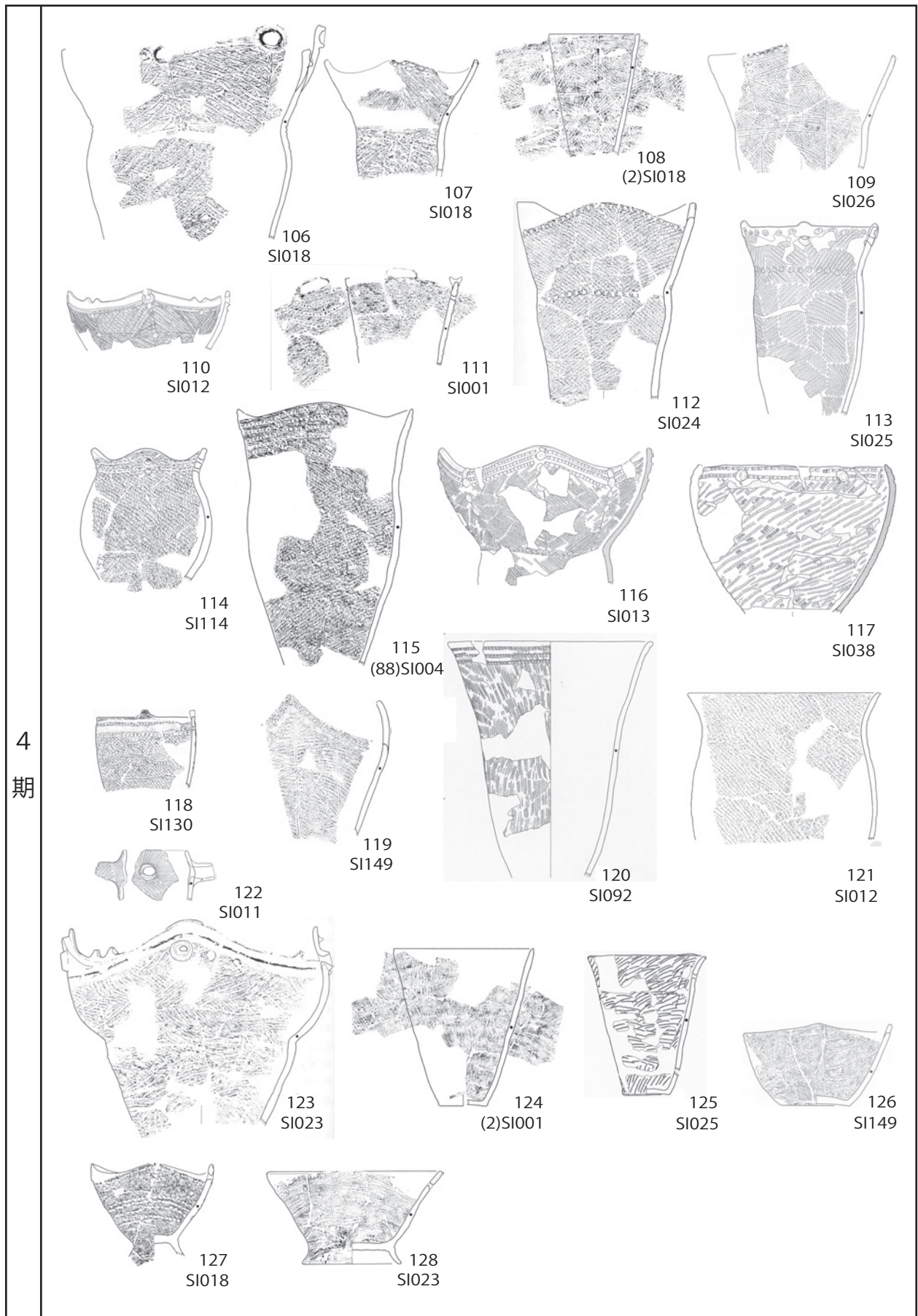
図10 時期別主要土器3 (S=1/8)



4期 85・87～89・92・97・98・101：原畑 86・90・91・93～95：駒形
 96・99・100・102・103：富士見 104・105：小山台 A

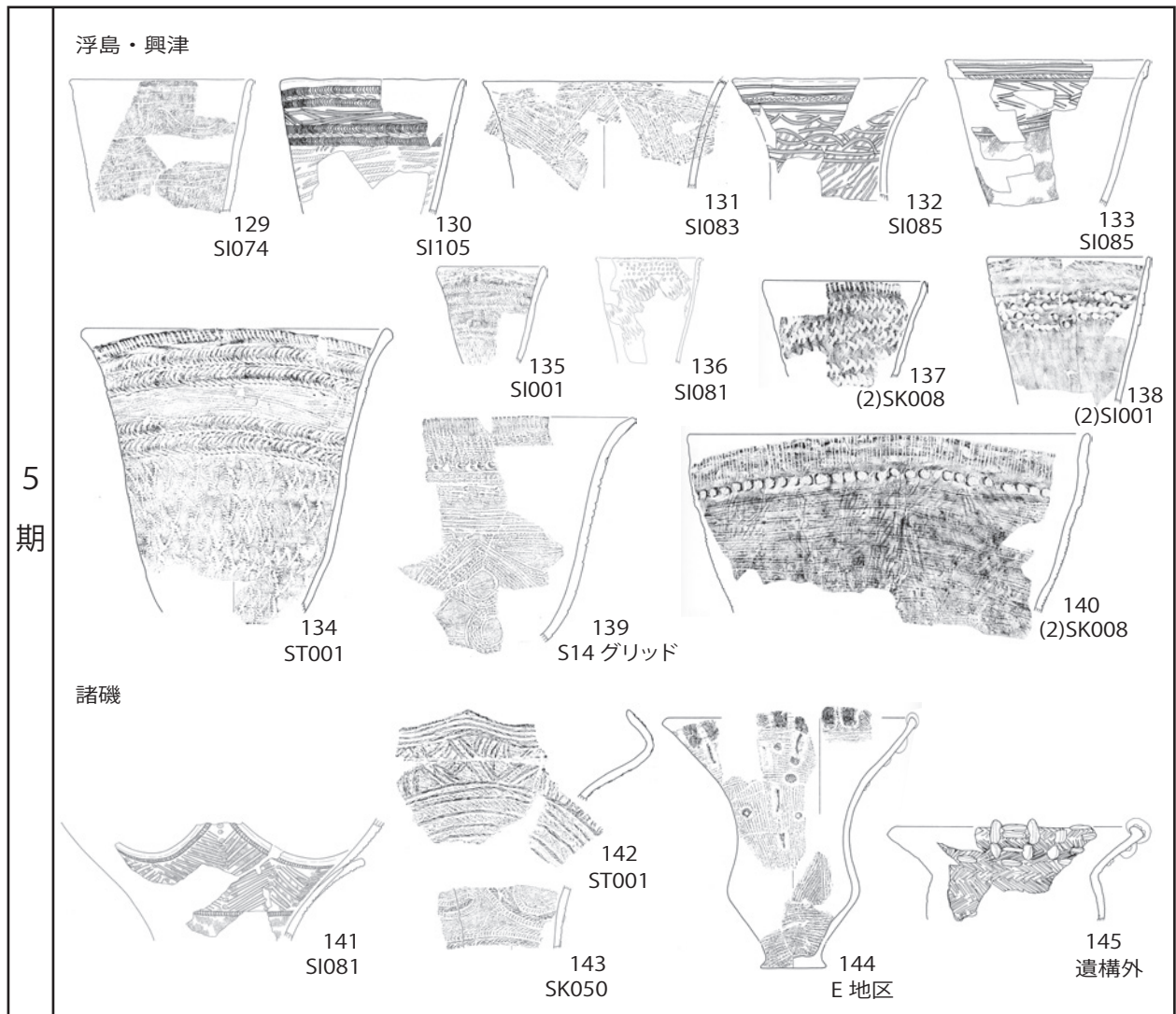
図11 時期別主要土器 4 (S=1/8)

4
期



4 期 106・107・109・112・123・127・128：小山台 A 108・124：矢船 I 110・116・117・121：駒形
 122：原畑 111：花前 I 114・118・119・126：大松 113・120・125：富士見 115：小山台 B

図12 時期別主要土器 5 (S=1/8)



5期 129～131・143：駒形 132・133・136・139・141・144：富士見 134・142：小山台 A
135・145：花前 I 137・138・140：矢船 I

図13 時期別主要土器 6 (S=1/8)

4 生産用石器の組成から見た森林資源利用の在り方

前節で柏北部東遺跡群前期集落の概要を述べたが、ここではこの遺跡群における森林資源利用の在り方について、生産用石器の組成比率から接近を図る。方法は全11冊の発掘調査報告書中で帰属時期が明確な竪穴住居跡から出土した生産用石器を悉皆的に抽出し、集落分析で用いた時期区分ごとに各生産用石器の数量などを提示し、得られたデータから考察する。また、今回は分析対象外とした動植物遺体から見た陸・海産資源利用傾向について、西野らの研究成果から概要をまとめておく。

(1) 各期の生 表2 柏北部東各期の石器組成と出土傾向

生産用石器の内容と特徴	石鏃	打製石斧	石皿・磨石類	合計	石器有住居数	住居数	石器出現率	1軒/石器数
0期	28	2	10	40	11	36	30.6%	1.1
1期	161	8	60	229	28	35	80.0%	6.5
2期	18	0	0	18	3	5	60.0%	3.6
3期	43	3	24	70	14	24	58.3%	2.9
4期	125	18	326	469	137	257	53.3%	1.8
5期	18	1	21	40	19	29	65.5%	1.4
総計	393	32	441	866	212	386		
	45.4%	3.7%	50.9%					

内訳、住居総数に対する石器出現率、1軒当たりの石器数を示した。また、各期の生産用石器の出土数から組成比率を示し（図14）、それぞれの時期の特徴を可視化するために三角グラムでも示した（図15）。

0期は総数40点で、内訳は石鏃28点、打製石斧2点、石皿・磨石類10点である。住居跡の総数は36軒で石器出現率は30.6%、1軒当たりの石器数は1.1点である。1期は総数229点で、内訳は石鏃161点、打製石斧8点、石皿・磨石類60点である。住居跡の総数は35軒で石器出現率は80.0%、1軒当たりの石器数は6.5点である。2期は総数18点すべてが石鏃である。住居跡の総数は5軒で石器出現率は60.0%、1軒当たりの石器数は3.6点である。3期は総数70点で、内訳は石鏃43点、打製石斧3点、石皿・磨石類24点である。住居跡の総数は24軒で石器出現率は58.3%、1軒当たりの石器数は2.9点である。4期は総数469点で、内訳は石鏃125点、打製石斧18点、石皿・磨石類326点である。住居跡の総数は257軒で石器出現率は53.3%、1軒当たりの石器数は1.8点である。5期は総数40点で、内訳は石鏃18点、打製石斧1点、石皿・磨石類21点である。住居跡の総数は29軒で石器出現率は65.5%、1軒当たりの石器数は1.4点である。

データから読み取れる事項をいくつか記す。まず、三角グラムに顕著なように総じて打製石斧の出土数は少なく各期の比率も5%未満と低いので、柏北部東遺跡群においては早期条痕文期～前期を通じて、打製石斧を掘り具とした根茎類の利用は極めて低調であったと言える。そのため、森林資源利用の在り方は、石鏃（狩猟）と石皿・磨石類（堅果類の利用）の組成比率から類推することになる。

0期から3期までは石鏃が優勢である。2期はサンプル数が少なく全てが石鏃であるので狩猟に大きく偏るが、0期と1期は母数に約3倍の差があるものの、石鏃と石皿・磨石類の比率はほぼ同じである。3期になって石皿・磨石類の比率がやや上がる。このことから早期後葉～前期前葉までは狩猟による森林資源利用が優勢であり、次第に堅果類の利用度が上がっていったと推察される。

前節で既述したように、前時期を通じて竪穴住居跡やその周辺を利用した石鏃製作跡が検出されている。1期が最も多く次いで4期となるが、遺構数から見ると1期の比率が高い。石器出現率と1軒当たりの石器数についても、1期の数字

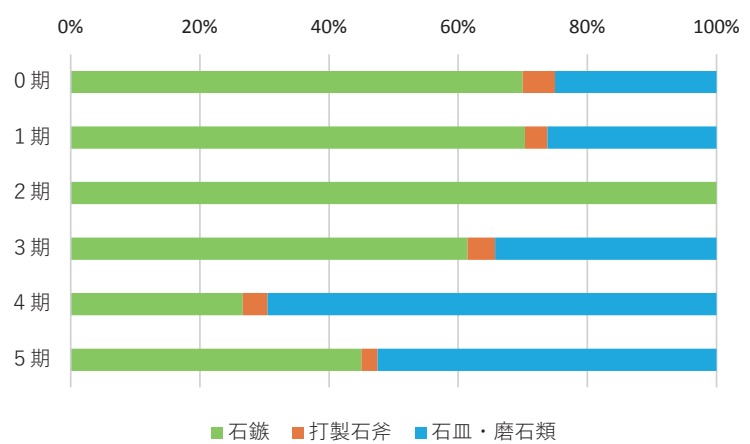


図14 柏北部東遺跡群各期の生産用石器組成

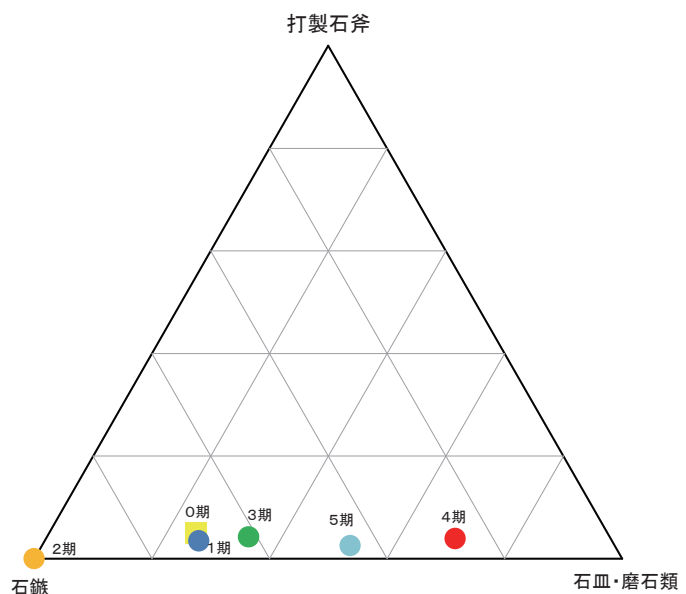


図15 柏北部東遺跡群石器三角グラム

が突出して高い。これは複数の石鏃製作跡でまとまった石鏃が出土していることが大きな要因である。これに対して0期の石器出現率と1軒当たりの石器数は、各期の中で最も低い。これは石鏃が多出した竪穴住居跡は1軒あるものの、石鏃製作の多くは竪穴住居跡の位置から外れた石器集中地点で行われた可能性があることに起因するもので、それらは今回の方法ではカウントされないためである。

3期にその予兆があるが、4期では比率が69.4%と石皿・磨石類が優勢となる。石器出現率と1軒当たりの石器数については、両時期ともさほど多くはない。5期については0期同様にサンプル数がやや少なく、1軒当たりの石器数は最も少ないが、石器出現率は60%を超えている。石皿・磨石類がやや優勢で、石鏃の比率が戻っている。このことから前期中葉の森林資源利用の在り方は、堅果類の利用に基軸を置き狩猟を組み合わせていたと推察され、前期後葉～末葉になると、再び狩猟と堅果類の利用が均衡した可能性を指摘し得る。

チャートを主体とする遺跡内での石鏃製作は前期を通じて行われるが、時期を下るにしたがい1軒当たりの出現率が低下する。この傾向は4期までの石鏃の組成比率と調和的であるが、5期は異なる。

(2) 既往研究との比較

前項で述べた柏北部東遺跡群縄文前期集落における森林資源利用の推移について、筆者が取りまとめた千葉県北西部地区前期集落の成果¹⁰⁾、および西野・植月が取りまとめた動植物遺体による奥東京湾沿岸前期初頭～前葉集落の生業・居住様式を復元した成果と比較検討する。

①千葉県北西部地区の前期集落

表3に各期の生産用石器の数量と器種ごとの内訳、住居総数に対する石器出現率、1軒当たりの石器数を示した¹¹⁾。また、図16

表3 千葉県北西部地区北西部各期の石器組成と出現傾向
に各期の組成比率、図17
に三角グラムをそれぞれ
示した。なお、前期前葉
は今回の各区分と異なり、
二ツ木・関山Ⅰ式期と関
山Ⅱ式期に区分している¹²⁾。

	石鏃	打製石斧	石皿・磨石類	合計	石器有住居数	住居数	石器出現率	1軒/石器数
花積下層	55	3	27	85	13	15	86.7%	5.7
二ツ木・関山Ⅰ	24	0	11	35	17	22	77.3%	1.6
関山Ⅱ	28	11	107	146	38	44	86.4%	3.3
黒浜	72	23	295	390	148	269	55.0%	1.4
諸磯・浮島	51	4	33	88	23	34	67.6%	2.6
総計	230	41	473	744	239	384		
	30.9%	5.5%	63.6%					

打製石斧の比率は低く、最大でも関山Ⅱ式期の7.5%であるので、千葉県北西部地区に所在する前期遺跡群においても、根茎類の利用は低調であったと言えよう。やはり、森林資源利用の在り方は、石鏃(狩猟)と石皿・磨石類(堅果類の利用)の組成比率から類推することになる。

花積下層式期は駒形遺跡の一部から出土したものが全てなので、比較対象外とする。二ツ木・関山Ⅰ式期は総数85点で、内訳は石鏃24点、打製石斧0点、石皿・磨石類11点である。住居跡の総数は22軒で石器出現率は77.3%、1軒当たりの石器数は1.6点である。関山Ⅱ式期は総数146点で、内訳は石鏃28点、打製石斧11点、石皿・磨石類107点である。住居跡の総数は44軒で

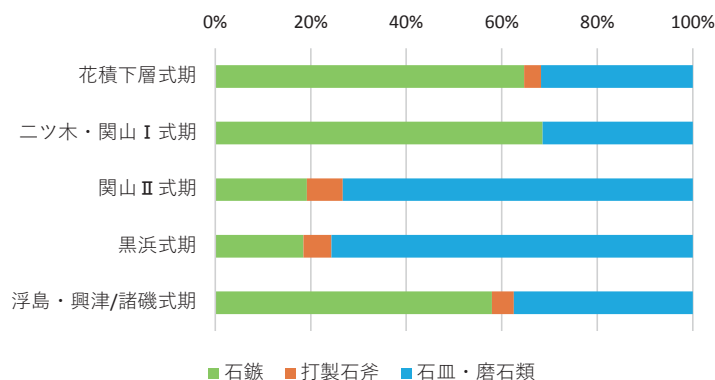


図16 下総台地北西部各期の石器組成

石器出現率は77.3%、1軒当たりの石器数は1.6点である。黒浜式期は総数390点で、内訳は石鏃72点、打製石斧23点、石皿・磨石類295点である。住居跡の総数は269軒で石器出現率は55.0%、1軒当たりの石器数は1.4点である。諸磯・浮島式期は総数88点で内訳は石鏃51点、打製石斧4点、石皿・磨石類33点である。住居跡の総数は34軒で石器出現率は67.6%、1軒当たりの石器数は2.6点である。

出土総数にばらつきはあるが、二ツ木・関山Ⅰ式期までは石鏃が優勢で、関山Ⅱ式期と黒浜式期では石皿・磨石類が優勢、諸磯・浮島式期になると再び石鏃が優勢となることがこれらのデータから読み取ることができる¹³⁾。このことから前期前葉までは狩猟による森林資源利用が優勢ながら次第に堅果類の利用度が上がり、中葉では堅果類の利用が優勢となり、後葉～末葉になると再び狩猟と堅果類の利用が均衡した可能性があるという、柏北部東遺跡群縄文前期集落における森林資源の利用の在り方に概ね調和的である。

②奥東京湾沿岸の前期初頭～前葉集落

表4に各期の生産
用石器の数量と器種
ごとの内訳、住居総
数に対する石器出現
率、1軒当たりの石

表4 奥東京湾沿岸前期初頭～前期の石器組成と出土傾向

	石鏃	打製石斧	石皿・磨石類	合計	石器有住居数	住居数	石器出現率	1軒/石器数
花積下層式期	63	31	98	192	47	92	51.1%	2.1
関山Ⅰ式期	109	43	109	261	54	86	62.8%	3.0
関山Ⅱ式期	112	46	93	251	65	119	54.6%	2.1
総計	284	120	300	704	166	297		

器数を示した。また、図18に各期の組成比率、図19に三角グラムをそれぞれ示した。

花積下層式期は総数192点で、内訳は石鏃63点、打製石斧31点、石皿・磨石類98点である。住居跡の総数は92軒で石器出現率は51.1%、1軒当たりの石器数は2.1点である。関山Ⅰ式期¹⁴⁾は総数261点で、内訳は石鏃109点、打製石斧43点、石皿・磨石類109点である。住居跡の総数は22軒で石器出現率は77.3%、1軒当たりの石器数は1.6点である。関山Ⅱ式期は総数146点で、内訳は石鏃28点、打製石斧11点、石皿・磨石類107点である。住居跡の総数は44軒で石器出現率は77.3%、1軒当たりの石器数は1.6点である。

データから読み取れる事項をいくつか記す。まず三角グラムに顕著なように、打製石斧の出土比率は今回組上に載せた柏北部東遺跡群や千葉県北西部のデータより高く、花積下層式期16.1%、関山Ⅰ式期16.5%、関山Ⅱ式期18.3%となり根茎類の利用度が上がるようである。それでも森林資源利用の在り方は、石鏃（狩猟）と石皿・磨石類（堅果類の利用）の組成比率から類推することになる。

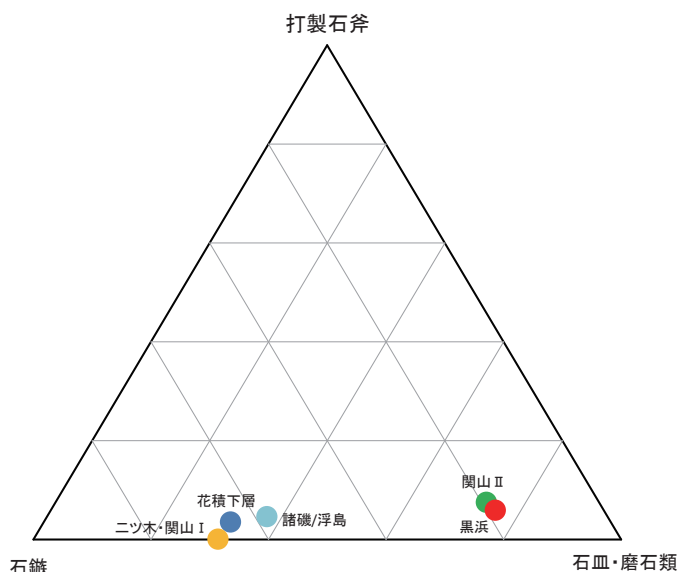


図17 千葉県北西部地区前期の石器組成

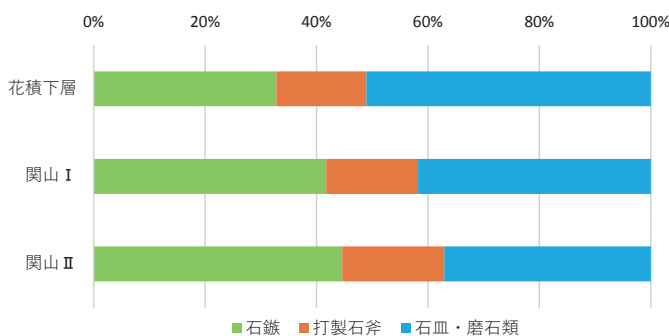


図18 奥東京湾前期初頭～前葉の石器組成

花積下層式期は石皿・磨石類が優勢で、関山Ⅰ式期では石鏃と石皿・磨石類が同比率、関山Ⅱ式期では石鏃が優勢となる。この結果をそのまま読み取れば、前期初頭は堅果類の利用度が高く、次第に狩猟が盛んになり前葉後半では狩猟が堅果類の利用を上回ることとなり、柏北部東遺跡群や千葉県北西部地区の森林資源の利用の在り方とは相反することになる。分析に用いた奥東京湾沿岸に所在する遺跡の範囲には、奥東京湾西岸・古入間湾北岸の大宮台地の集落や、古入間湾南岸の武蔵野台地の集落も含まれており、打製石斧の増加や、石鏃と石皿・磨石類の比率の逆転などには地域性や遺跡の立地、集落の規模などが関係している可能性がある。

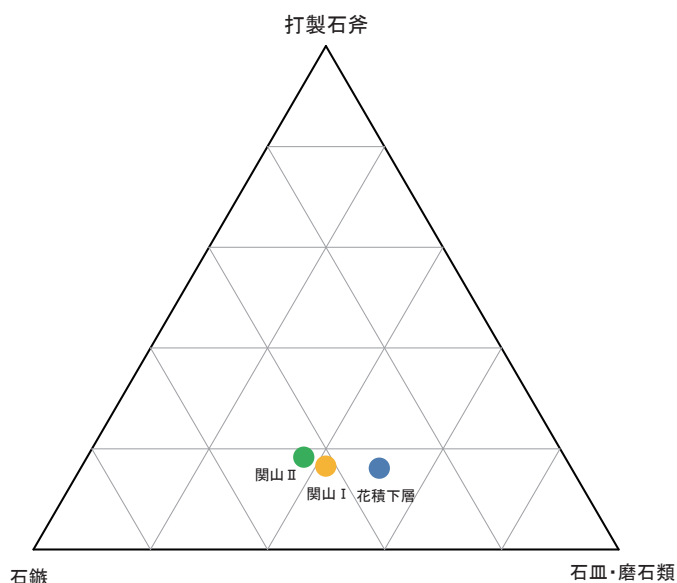


図19 奥東京湾前期初頭～前葉期の石器三角グラム

石鏃と石皿・磨石類の比率の逆転などには地域性や遺跡の立地、集落の規模などが関係している可能性がある。

③動植物遺体から見た陸・海産資源利用傾向

今回は動植物遺体のデータに基づく資源利用の在り方について、詳しく言及できていないため、西野・植月の研究成果を中心に概要をまとめた¹⁵⁾。

さいたま市寿能遺跡や富士見市水子貝塚周辺地の花粉分析や大形植物化石の組成から、前期にはコナラ亜属の優先する落葉広葉樹林(ナラ林)が発達したと推定されている。コナラ亜属の有用植物にはコナラ・クヌギ・ミズナラなどがあり、ナラ林にはクリやオニグルミという有用な堅果類が伴う。植物遺体としては、関山貝塚他の複数遺跡で炭化クルミが出土している。落葉広葉樹林の発達は、保存・加工が可能な堅果類などの有用植物が安定的に入手、食料化することができ、比較的定住度の高い居住様式への変化を生み出す重要な要素になったと考えられている。

動物遺体の多寡は、この時期の貝層の主体を占める住居内貝層の廃棄様式に大きく左右される。住居内貝層は黒浜式期を筆頭に貝類のみが廃棄される場合が多々あり、獣骨の集積などは特別な意図が介在している可能性も高く、この時期の生業の内容や資源の利用傾向を動物遺体の出土量から判断するのは、なかなか難しい問題である。また、サンプル採取された資料も少ないため、小型種の回収率も低いと思われる。したがって主な種名を記すにとどめるが、鳥獣類はイノシシとシカ、ガンカモ類、魚類はマダイとクロダイとなる¹⁶⁾。

貝類は海産資源利用状況を知る手掛かりとなるほかに、主体種によって早期後半～前期末葉までの海進・海退期の古海況を知る有効な手掛かりにもなり得る。奥東京湾沿岸の前期前葉貝塚群を例にとれば、東岸(下総台地)側と西岸側(大宮台地・武蔵野台地)で主体種が異なることがわかっている。前者は海底谷が発達していることによる塩分濃度の濃い海況、後者は台地から延びた埋没波蝕台の発達による潮流の弱まりや塩分濃度の薄まりが認められる海況である。この地形的影響によって構成貝種は前者がすべて内湾・湾奥のハマグリ・ハイガイ・アサリが主体、後者が沖寄りの数遺跡でハイガイが主体であるほかはヤマトシジミ主体となる。これらに準構成種のマガキを加えた貝類が、奥東京湾沿岸の前期前葉貝塚群が好んで

利用した貝類である。

古鬼怒湾奥部に位置し、海水産貝塚の分布の最奥部にあたる柏北部東遺跡群の貝類利用について、全体的なとりまとめは未了であるが、駒形遺跡の成果から主体種を中間報告しておく¹⁷⁾。早期後葉には湾奥泥底干潟種のマガキと内湾砂底種のウミニナが利用される。マガキは前期後葉まで利用が続くが平均サイズが小さくなり、ウミニナは殻頂部を折り取り身を取り出す方法で該期のみ好んで食用とされる。前期初頭から湾奥泥底干潟種のハイガイと内湾砂底種のハマグリの利用が始まる。ハマグリは前期後葉まで一貫して利用されるが、ハイガイは前期中葉以降になるとほとんど利用されず、代わってハマグリより泥のやや多いところに棲む、内湾砂底種のアサリ・サルボオが利用されている。これらは古鬼怒湾の海進・海退による古海況を反映していると考えられる。

5 おわりに

以上、記述した早期後葉～前期集落の変遷と生産用石器の組成から見た森林資源の利用の在り方を基に、千葉県北西部地区における柏北部東集落群の位置づけをまとめておく¹⁸⁾。

(1) 各期の遺跡分布と柏北部東集落群の位置づけ

0期（早期後葉条痕文期）の集落は遺跡群の沿岸各所に設営された。該期については下総台地まで範囲を拡大して遺跡分布を瞥見してみると、海進に伴い東京湾岸や印旛沼周辺など沿岸部を中心に早期沈線文期以前に比べて分布範囲が拡大し、貝塚も増えていることがわかるので、柏北部東集落群の在り方もその様相と調和する。

以下に記す前期の遺跡数は、千葉県北西部に限る。

1期（花積下層式期）は20遺跡と少ないが、奥東京湾・古鬼怒湾奥部の各水系に1か所の拠点集落がある傾向である。その中でも柏北部東遺跡群の環状のまともりは集落的居住の結果と捉えられ、注目される。

2期（二ツ木式期）は遺跡数を3期（関山式期）と分別して把握していないが、県内でも千葉市土気東遺跡群の東台遺跡・小山遺跡・南川原坂第2遺跡・住吉遺跡、勝浦市上長者ヶ台遺跡に該期集落が認められるほかは、現時点で確実な事例を見出していない。柏北部東遺跡群の事例は小規模・分散的であるが、全体的な様相を反映するものなのかもしれない。

3期（関山式期）は88遺跡で1期（花積下層式期）に比べ遺跡数が増えているが、これは各水系に拠点集落と複数の小規模集落からなる遺跡群が形成されたことによる。中でも奥東京湾側の松戸市幸田貝塚は類稀な規模の拠点集落であり、そのような集落が営まれた背景について今後、陸産・海産資源の利用の在り方を資源生産・居住様式的視点で考察する必要がある¹⁹⁾。柏北部東遺跡群の該期集落はやや小規模で分散的な集落と捉えられる。

4期（黒浜式期）は377遺跡と飛躍的に増加する。3期の遺跡群間の空閑は広いが、該期では各遺跡群の遺跡数が増加した結果、遺跡群の境が把握できる程度の空閑となる。各遺跡群の拠点集落は数10軒規模である。柏北部東遺跡群の257軒は細別を含むものの、従前の知見を超える関東最大級の規模であり、多寡の差はあれ遺跡群の台地全域に広く分布する。既述した一定のまともりをもつ複数の住居跡の分布をどのような単位の集落として捉えるのか、細別後に再考する必要がある。

5期（浮島・興津/諸磯式期）は271遺跡と4期より減少する。海退に伴い、遺跡分布の中心や貝塚を伴う遺跡が湾奥から湾口に向かって移動する。貝塚数も減少するが、特に古鬼怒湾側で顕著である。柏北部

東遺跡群の事例は小規模・分散的であり、千葉県北西部の様相と調和的である。また、古鬼怒湾側では最末と考えられる海産貝類利用も確認されている。

このように黒浜式期については課題となる新知見があるが、柏北部東遺跡群各期の集落様相は概ね北西部地区に係る既往研究の成果に整合している。

(2) 柏北部東遺跡群の集落形成と生産活動

既述したように、生産用石器の組成から見た森林資源の利用の在り方は、早期後葉から前期前葉までは狩猟が堅果類の利用より優勢であるが、その終わりごろには堅果類の利用度が上がり、前期中葉になると堅果類の利用に基軸を置き狩猟と組み合わせていたと考えられ、前葉後半から中葉に森林資源利用の在り方が変容したと推察される。5期では堅果類の利用がやや優勢であるが、狩猟の比率が戻っている。

柏北部東遺跡群は、奥東京湾、古入間湾、古鬼怒湾と3つの内湾が集まる地域に属し、海進によって海産資源の利用が本格化した早期後葉～前期に形成された遺跡群である。今回は海産資源を明示できなかったが、西野雅人が指摘するように海産資源と森林資源を組み合わせ食材とした食文化が最初に本格した時期と考えられる。組み合わせ食材となる堅果類は貯蔵が可能であり、その利用が高まった黒浜式期が集落形成の盛期になったこととも関係する可能性がある。

(3) 今後の課題

今回はデータの提示が出来なかった動植物遺体から見た資源利用の在り方、既往研究以降の千葉県北西部の遺跡データによる遺跡分布図、生産用石器組成の更新を行い、本論の蓋然性を検証していきたい。

最後に改めて一言お断りすれば、生産用石器の組成から見た森林資源の利用の在り方を研究する方法は、今村や西野も触れているように、分析対象となる生産用石器の用途の規定、遺跡ごとに条件の異なるタフオノミーの検討という難しい問題が付きまとうほかに、各石器とりわけ石皿・磨石類のカウント方法などにより評価も変容すると思われる。あくまでも傾向を類推する手段であり、生業・居住様式を検討は複数の方法による検証が必要である。

今回の作図のうち、集落の変遷については片山祐介氏の協力をいただいた。また、筆者が行った他の作図についても種々助言をいただいた。末筆ながら記して深謝したい。

註

- 1) 柏市駒形遺跡と同原畑遺跡の整理作業・報告書刊行を担当した。このほかに同富士見遺跡と「柏市大松遺跡－縄文時代以降編2」の縄文土器の事実記載に係り、担当者に協力した。
- 2) (公財)千葉県教育振興財団 2009「第3章 まとめ 第2節 千葉県北西部地区を主とした縄文前期遺跡の分布と駒形遺跡における生産活動」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡縄文時代以降編1－』・上守秀明 2010「下総台地北西部における縄文前期の遺跡分布と生産活動－基礎データの提示と展望－」『房総の考古学 史館終刊記念』
- 3) 日下部善己 1972「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相(東北地方南部において)」『福島考古』13 一条孝夫 1973「縄文時代における労働用具のあり方について－特に東北地方南部について－」『福島大学考古学研究会研究紀要』3
- 4) 小林康男 1974「縄文時代生産活動の在り方(1)－特に中部地方における縄文時代前期中期の石器組成を中心として」『信濃』26-12・小林康男 1975「縄文時代生産活動の在り方(2)・(3)・(4)－特に中部地方における縄文時代前期中期の石器組成を中心として」27-2・4・5
- 5) 野口行雄 1985「房総半島における縄文時代生産活動の様相－縄文時代中期から後期前半における生産用具組成の

在り方』『千葉県文化財センター研究紀要』9

- 6) 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民俗誌 - 渡辺仁教授古稀記念論文集-』
- 7) 西野雅人 1999「石器組成と群集貯蔵穴からみた森林資源の利用」『千葉県文化財センター研究紀要』19
- 8) 西野雅人・植月学 2003「動物遺体による縄文前期前葉の生業・居住様式の復元 - 幸田貝塚と奥東京湾沿岸の遺跡群」『松戸市立博物館紀要』10
- 9) 住居跡の内訳・総数は過去に公表してきたものと若干異なるが、今回の修正データを正とする。なお、過去に公表した花前Ⅰ遺跡の黒浜式期には常磐自動車道事業範囲から検出された12軒を含めていたが、今回は除外した。
- 10) 主な対象は千葉県北西部の奥東京湾区・古鬼怒湾区としたが、それに連なる東京湾岸区の市川市～船橋市の真間川低地-海老川低地、習志野市～千葉市北西部の菊田川谷と花見川低地-汐田川谷、古鬼怒湾区の柏市(旧沼南町)～印西市西部の手賀沼低地谷奥と手賀沼低地南部-印旛沼低地北部、八千代市の印旛沼低地南部に所在する遺跡も分析対象に加えた。
- 11) 前出2)の上守 2010には(公財)千葉県教育振興財団 2009に掲載された駒形遺跡のデータを含んでいる。花積下層式期は15/15軒、二ツ木・関山Ⅰ式期は6/22軒、関山Ⅱ式期は2/44軒、黒浜式期は12/269軒、諸磯・浮島式期は3/34軒となる。
- 12) 当時は二ツ木式と関山Ⅰ式を単独の時期で扱うにはデータが少なく、分別して記載する事例も稀であったことが挙げられる。加えて関山Ⅰ式期と関山Ⅱ式期では石器組成に大きな違いがあったため、よりそこを顕在化させる区分が有意と考えたことから、このような時期設定にした。
- 13) 松戸市幸田貝塚は大半が未整理であるが、一部報告済のデータを用いた。今後予定されている本報告によって花積下層式期～関山Ⅱ式期の様相が明らかになれば、議論も深まると思われる。関山Ⅱ式期では、大きな拠点集落である奥東京湾今上低地南部-矢切低地水系の松戸市幸田貝塚で遺構出土の石器数が多く石鏃と石皿・磨石類の比率も拮抗しているが、他の遺跡では石皿・磨石類に大きく傾斜していることが挙げられる。また、黒浜式期では今上低地水系の流山市若葉台遺跡他に他に比して石鏃・打製石斧も一定数あり石皿・磨石類に大きく偏らないが、黒浜式期総体では石皿・磨石類が主体となる。諸磯・浮島式期では海老川低地水系の古和田台遺跡と飯山満東遺跡で石鏃が多出する住居跡があり組成に大きな影響を及ぼすなど、各期で細部に地域性が認められる。
- 14) 対象となった遺跡データを見ると、さいたま市貝崎貝塚などで二ツ木式期の住居跡のものも含まれるので、関山Ⅰ式期に一括されたと思われる。また、文中にも関山期初頭の「二ツ木式土器」という記載がある。
- 15) 前出註8)ならびに西野雅人 2009「関東地方南部における縄文早・前期の古海況と貝塚形成」『千葉縄文研究』3の記載を参考とした。
- 16) マダイは主に外洋水の影響があるところに生息するのに対し、クロダイは浅海域を好み、汽水域にも進入する。前者は時期を問わず奥東京湾湾口部の遺跡に多く、後者は東京湾真間川低地水系の遺跡に多い。その理由として前者には内湾域であるにもかかわらず、塩分濃度の高い外湾域から続く水深のある海底谷が卓越し、後者は小規模で水深の浅い内湾的環境であったからだと考えられている。
- 17) (公財)千葉県教育振興財団 2013「第2章第8節 6貝類利用の特徴」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5-柏市駒形遺跡- 縄文時代以降編2』の記載を基にまとめた。
- 18) 早期後葉の遺跡分布とその評価については、西野雅人 2023『南関東地方における縄文時代早期の様相』岩宿フォーラムの発表データを参照した。前期の遺跡分布については、註2)の文献で筆者が悉皆調査したデータの評価を参照した。なお、前期各期の遺跡数は当時(15年前)の数値であることを断りおく。
- 19) 1970年代に区画整理事業に伴い行われた発掘調査によって、縄文前期観を大きく転換し得る膨大な資料が蓄積された。その重要性に鑑み、1994年に土器・石器・骨角器等266点が国の重要文化財に指定されたが、整理作業は概報が刊行されたのみで多くが未整理、本報告書未刊行の状態にあり、遺跡の真の重要性は明らかにされていない。遺構内貝層から採取された動物遺体は膨大で、整理作業が進めば遺跡の重要性について知見が得られると思われる。現在、松戸市によって整理・報告書刊行事業が予定されている。

参考文献

- (公財) 千葉県教育振興財団 2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5 - 柏市駒形遺跡 - 縄文時代以降編2』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6 - 柏市富士見遺跡 - 縄文時代以降編1』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7 - 柏市富士見遺跡 - 縄文時代以降編2』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2016『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書9 - 柏市大松遺跡 - 縄文時代以降編2』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11 - 柏市花前I遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船I遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・寺下前遺跡・八反田台遺跡 - 縄文時代以降編』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書12 - 柏市小山台遺跡A区 - 縄文時代以降編』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2018『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書14 - 柏市花前I遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・寺下前遺跡 - 縄文時代以降編』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書12 - 柏市小山台遺跡B区 - 縄文時代以降編』
- (財) 千葉県教育振興財団 2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2 - 柏市駒形遺跡 - 縄文時代以降編1』
- (財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3 - 柏市原畑遺跡 - 縄文時代以降編1』
- (財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4 - 柏市大松遺跡 - 縄文時代以降編1』
- 田中和之 2008 「羽状縄文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション